

ワールド・カフェ「学校図書館と生涯学習」意図開き

専修大学文学部人文・ジャーナリズム学科 小峰直史

「ワールド・カフェ」を実施してみたいという声がホストに寄せられた。

その要望に少しでも答えるために、ワールド・カフェを行うのに役立つプラスアルファの Tips を付け、皆さまの実践を応援できる小稿としたい。

まず、代表的な文献の紹介をおこない、次に今回のワールド・カフェをデザインしホストした意図を開くことでその目的にアプローチする。

ワールド・カフェを詳しく知り、実践するには、創始者のアニータ・ブラウン&デイビッド・アイザック (2007)『ワールド・カフェ カフェ的会話が未来を創る』HUMAN VALUE を手に取ることをお勧めする。この本では、ワールド・カフェの7つ中核的なデザイン原理が丁寧に説明されている。必読文献である。日本での第一人者である香取一昭・大川恒 (2009)『ワールド・カフェをやろう！』日本経済新聞出版社も外せない1冊である。この文献にはワールド・カフェの活用事例も紹介されていて、カフェが拓く可能性に触れることができる書籍である。香取・大川 (2011)『ホールシステム・アプローチ』日本経済新聞出版社は、ワールド・カフェを含めたダイアログをベースとするホールシステム・アプローチをコンパクトに解説してくれる。ワールド・カフェと他の手法を組み合わせることで、互いの特徴の強みを活かした魅力的な場が創られる。そんな可能性を見せてくれる本である。

1 ワールド・カフェ選択の理由は

ワークショップをデザインする上でもっとも重要なのは、ゴールである。2日間のサマー・ワーク・キャンプを経て、メンバーがどのような「お土産」を持ち帰るのかと言い換えても良い。主催者の SLiiiC 様からは、「生涯学習の一つの機能としての学校図書館について考えるワークショップ」というテーマをいただいた。企画意図を尋ねるミーティングを2回持っていただき、何のためにこのワークショップを「専門外」の私に依頼したのだろうか。初日の高井陽氏の講演をキックオフとし、2日目の午前のワークショップ開始時まで、「学び続けるということ」について対話がどのように深められていくのか、プログラム構成を前に考え続けた。

難航した末見つけた答えは、このサマー・ワーク・キャンプそのものの中にあった。学校図書館に関わるおおよそ一人職種の皆さんが、全国から集うこのキャンプの存在意

義に。参加者同士がつながりあい、対話をすることで皆さんの明日からの実践をエンパワーするにはダイアログを基調とする「ホールシステム・アプローチ」が良いだろう。しかも今回の企画のコンセプトには「学び人」と「働き人」とがともに学び合うとある。ワークショップの時間と幾つかの前提状況から判断して、ワールド・カフェを採用することとした。

2 問いづくりと全体セッションのデザイン

ワールド・カフェで参加者がダイアログに集中するには、ホストが「力強い質問」^①を用意し、それを適切に配列することが肝となる。

効果的な問いを準備するには、テーマに関する質問を書き出し、どれが最も言葉を引き出すのかをチームで検証するのが良い。第1ラウンドで準備した3つの問い（「子供が〇〇した時にすすめたい本は？」、「あなたにとって最高の図書館司書とは？」、「このワークショップにいらっしやっただ理由は？」）は、自己紹介とダイアログの準備運動を兼ねた問いとして、研究室の若手二人が中心となり知恵を出し合って作ったものである。

「力強い問い」作りに、公式フレームなどは存在しないが、探求を促すオープン・エンドな質問が良いとされている。SLiiicのワールド・カフェでは、第2ラウンドで「学び」の定義を行い、第3ラウンドで生涯学び続けることが求められている意義を対話し、第4ラウンドで自らの実践を問うという、定義⇒意義・要因⇒行動という流れを採用した^②。教育現場は理念だけではなく、行為が求められるし、行為とリフレクションの循環により、新しい実践が生まれるわけであるからこのような問いの配列を採択した。

種明かしをすると、ワークショップ当日までの学びの展開によりこれらの問いとその流れの確定を待つことを待つこととした。高井陽氏の講演直後にホストパートナーの稲井田、鈴木両名と話し合った。彼女らは午後の学生企画に参加するので、その後の学びの展開から判断していただき、「問いの構成に支障はない」との二人からのOKメールを待ち、私はパワーポイントのスライドの保存ボタンを押したという次第である。

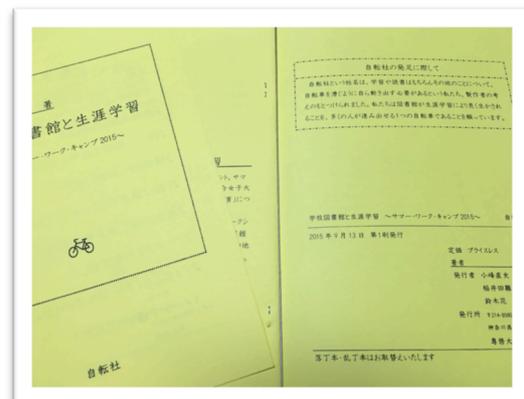
全体共有のセッション（ハーベスト）の設計には最も悩まされた。というのも、ワールド・カフェには、「拡散には強いが、収束は・・・」という「弱点」があるからだ。これを補うには全体セッションを設けることが不可欠である。参加人数と残された時間とを勘案し、一人で考える時間にて「感じたこと、考えたこと、共有したいこと、驚かされたこと、混乱させたこと」を各自言語化してもらい、それを各々が掲示、鑑賞することを全体セッション導入の仕掛けとした。

48枚のA4のシートを前に、私が今回のカフェで唯一介入した言葉は、「あっ！わかりました。その（皆さんが座っている）位置が良くないですね。皆さんテーブルから

立って黒板の前へどうぞ！」のみである。カフェのホストは対話の場を、静かにしっかりとホールドすれば良い、プロセスを管理するだけで良いという基本スタンスがある。喋りすぎがち＝前傾型のファシリテーターになりがちな私は、「話すためにはまず聴かれなければならない」^③という、聴くこと、そして待つことの意味と力を再確認した 2 時間 30 分でもあった。

3 学生との協働で学んだこと

今回のワールド・カフェの空間づくりは、実のところ私の想定を超えたものであった。皆様の手元にある自転車社発行の『学校図書館と生涯学習』の黄色いハンドブック、当日各テーブルに飾られた手作りの花、置かれたペン入れやゴミ箱の設置。これらは、8 月末にとある地域で開催されたワールド・カフェに参加した研究室のメンバーの一人が、空間デザインの効果の気づきをシェアしてくれたことから実現したものである。大学の見慣れた長四角のデスクを、自分たちの持てるスキルと限られた財源で飾るという姿勢には、頭がさがった。彼女たちの心を込めた対応が、私にも波及し、いつも使う「白い模造紙」から「カラー模造紙」に変更を主催者にお願ひし、少しでもモノトーンの大学教室を変えようというエネルギーに繋がった^④。





会場に入った時から、出会いに感謝する、来てくださった方に歓迎の気落ちを伝えることから関係作りはスタートする。それらが会話や思考の質にも影響を与えるということを、ファシリテーター慣れした私に、おもてなしの学びの空間作りのあり方を教えてくれたのが、若き教え子の存在であった。

4 私には夢がある～ワールド・カフェの可能性

会話はあるが対話がない。これが現代日本のコミュニケーション状況であろう。関係の質は、思考の質を高めることをワールド・カフェのダイアログを経験した方は気付くであろう。関係の質は行動の質をさらに変えるというポジティブなウェーブを引き起こす。

私には夢がある。小学校、中学校、高等学校、それぞれの学校現場でワールド・カフェが行われ、対話の文化が日本に根付くことに。静かな対話を経験することで、違いを認め合い、異質性の中から新しい文化を創造するきっかけが産まれることを。そしてその社会はいまより暖かく、生きやすい世の中になることを。

① アニータ・ブラウン&デイビッド・アイザック (2007)『ワールド・カフェ カフェ的会話が未来を創る』HUMAN VALUE, 114 ページ。

② 香取一昭氏の「ワールド・カフェ基礎講座」(2015年9月5日)にて、香取氏及び講座参加者から問いづくりに関してアドバイスを受けた。ここに改めて感謝の意を表します。

③ 鷲田清一 (2000)『「聴く」ことの力』TBS ブリタニカ, 14 ページ。

④ これらに加え、素敵な鉢を用意してくださったスタッフの方、感謝いたします。